



鬼怒川改修80周年

安全で、 うるおいのある川を 目指して



特別号
2007

安全で、うるおいのある川を目指して

多くの人たちに限りない恵みを与えている鬼怒川。しかし、かつては“あばれ川”と呼ばれ、水との闘いが太古より繰り返されてきました。その鬼怒川の改修工事に国が着手して、今年で80周年を迎えます。これを機にこれまでの洪水との闘いや、地域の歴史を振り返るとともに、多くの先人たちの努力に感謝しつつ、明日の鬼怒川について考えてみましょう。

鎌庭捷水路の開削工事に着手

明治時代、鬼怒川流域では洪水が相次ぎました。特に明治43(1910)年8月の洪水では、鬼怒川も含め関東全域で浸水被害が発生しました。この洪水を契機に、利根川改修計画が改訂され、16年後の大正15(1926)年に鬼怒川改修計画が策定されました。この改修計画に基づき、昭和2(1927)年、今から80年前に鬼怒川改修事務所が設置され、国直轄による鬼怒川の改修事業が始まりました。

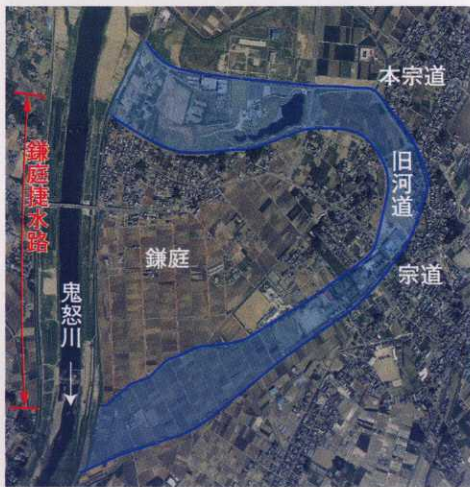
計画の大きな柱は、上流の栃木県三依村(現・日光市)へのダム建設、蛇行が甚だしい河道の改修、洪水調節のため調節地の築造の3つでした。

その中で、まず最初に行われたのが「鎌庭捷水路(かまにわしょうすいろ)」の開削工事で、昭和3(1928)年に着工されました。

鬼怒川は、茨城県の下妻市鎌庭付近で大きく曲がりながら流れていたため流れが悪く、たびたび洪水の被害がありました。また、ここには宗道河岸があり、洪水時は激流がぶつかり河岸の維持にも苦労してき

ました。

そこで、鎌庭地先から下流に向かって、真っ直ぐに流れる新河道を開削し、従来4,400mあった河道を2,050mに短縮させたのです。鎌庭捷水路は、昭和10(1935)年3月に通水しました。



青山士が主任技師として担当

鬼怒川改修事務所の初代主任技師となったのは、我が国の土木事業に大きな足跡を残した青山士(あおやまあきら)です。明治36(1903)年、青山は東京帝国大学土木工学科を卒業すると渡米。そして明治37年より45(1912)年まで、唯一の日本人技師としてパナマ運河開削工事に携わりました。帰国後、内務省に土木技師として入省し、荒

川放水路の建設工事を指揮しました。

当時、帝大卒の高等官は設計だけを担当し、現場に立つことはめったになかったといえます。しかし、青山は足にゲートルを巻き、作業服姿で毎日のように工事現場に出て、監督指揮にあたりました。腰にぶら下げた手ぬぐいがトレードマークだったそうです。

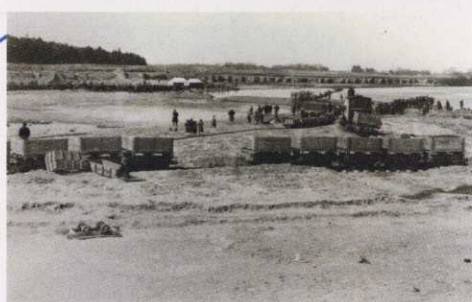
当初、鎌庭捷水路は、計画流量を流すのに最も



80年の歩み

- 大正15(1926)年12月
茨城県結城郡宗道村(現・下妻市宗道)及び栃木県河内郡本郷村(現・河内郡上三川町)に改修工事のための測量員詰所を開設。
- 昭和2(1927)年2月16日
茨城県真壁郡伊讃村大字伊佐山(現・筑西市伊佐山)に鬼怒川改修事務所を設置。
- 昭和8(1933)年4月1日
茨城県北相馬郡山王村(現・取手市山王)に小貝川改修事務所を設置。
- 昭和39(1964)年7月1日
鬼怒川工事事務所と小貝川工事事務所が統合し、下館市中館(現・筑西市中館)に下館工事事務所を設置。
- 平成5(1993)年6月7日
下館市二木成(現・筑西市二木成)に庁舎移転。
- 平成13(2001)年1月6日
省庁再編により国土交通省下館工事事務所となる。
- 平成15(2003)年4月1日
下館河川事務所に名称変更。

下館河川事務所は、鬼怒川約99.6km、小貝川約81.9km、合計181.5kmを管理。関東地方整備局管内で最も長い区間を担当しています。



▲茨城県結城郡千代川村
鎌庭捷水路通水当日(昭和10年3月17日)

効率のよい幅や深さ(最小の工事費となる断面)で計画されていましたが、青山は「大自然の力に抗ってはいけない。むしろ、そのエネルギーのスムーズな変換を追求すべきで、それが人類の英知である」と語り、河道の幅や深さなどについて、さまざまな工夫をしたそうです。

参考文献:『技師青山士の生涯』(高崎哲朗著・講談社)、『山河の変奏曲』(高崎哲朗著・山海堂)、『現代日本土木史』(パナマ運河建設に参加した日本人-青山士・高橋裕善・影国社)など。

1000年以上にわたる洪水との闘い

『続日本紀』の神護景雲2(768)年8月19日の条に毛野川(現・鬼怒川)の改修工事を行ったという記録があります。この記録によれば、今から1200余年も前の奈良時代に、現在の結城市から八千代町付近の曲がりくねった鬼怒川の付け替え工事を行っていたのです。人々は1000年以上にわたって鬼怒川の水害と闘ってきたのです。



約千年前の利根川水系想定図
(吉田東吾著「利根川水論考」より)

元号	西暦	鬼怒川の出来事
神護景雲2年	768	湾曲していた鬼怒川の付け替え工事の記録(関東地方最古の河川改修記録)
文禄3年	1594	徳川家康の命により利根川東遷が始まる
慶長12年	1608	鬼怒川・小貝川の分離工事が始まる
元和6年	1620	逆木用水が開削される
7年	1621	阿久津河岸、板戸河岸などの河岸が形成され、鬼怒川の舟運が始まる
寛永2年	1629	大木丘陵開削を行い、利根川へ合流させる
12年	1635	四ヶ所用水(中居指、本宗道、原、三板)と排水路の八間堀が開削される
慶安年間	1648~	このころより河岸問屋の機構・組織が確立し、鬼怒川の舟運が本格化する
承応3年	1654	宇都宮藩が舟運上の規定を定め、七河岸体制が確立
明暦2年	1656	市の堀用水開削
寛文2年	1662	稲荷川大洪水
天和3年	1683	日光大地震による山崩れで男鹿川がせき止められ、五十里湖が出現
享保8年	1723	大雨により、1683年に出来た天然ダムが崩れ、下野災害史上最大規模の「五十里洪水」が起こる
10年	1725	吉田用水が開削される
11年	1726	江連用水が開削される
寛政3年	1791	大宝平沼・江村沼・砂沼を再溜池とし、江連用水を廃止
文政12年	1829	四ヶ所用水を一本化した今日の江連用水が再興する
嘉永5年	1852	宇都宮暴風雨により田川、安川が大氾濫を起こす
安政5年	1858	鬼怒川・小貝川で洪水
30年	1897	鬼怒川・小貝川大洪水
33年	1900	利根川改修計画策定
35年	1902	足尾台風、鬼怒川暴風雨水害
43年	1910	梅雨前線と2つの台風により明治期最大の水害が関東全域を襲う
44年	1911	利根川改修計画改訂
大正3年	1914	暴風雨により鬼怒川が氾濫し、死者20人を出す
5年	1916	鬼怒川の直轄調査が始まる(内務省土木局)
15年	1926	内務省鬼怒川改修計画策定
昭和2年	1927	鬼怒川改修事務所設置

元号	西暦	鬼怒川の出来事
3年	1928	鎌庭捷水路工事着工
6年	1931	霞堤工事着工
8年	1933	五十里ダム建設工事着工。掘削中に断層発見で工事中止
10年	1935	鬼怒川改修計画改訂①。田中調節池工事着工
13年	1938	鎌庭捷水路通水。菅生調節池工事着工
16年	1941	関東地方を襲った台風により鬼怒川・小貝川が大洪水となる
22年	1947	五十里ダム建設計画復活。しかし太平洋戦争のため工事中断
23年	1948	鬼怒川改修計画改訂②
24年	1949	カスリーン台風により大洪水となる
25年	1950	アイオン台風により下流部浸水
31年	1956	利根川改修改訂計画策定(鬼怒川改修計画が統合)
32年	1957	キティ台風により鬼怒川全川で被害。さくら市大中大地先が破壊する
33年	1958	五十里ダム建設工事再開
38年	1963	五十里ダム竣工(完成当時ダム高日本一)
39年	1964	川俣ダム建設工事着工
40年	1965	菅生調節池越流堤、囲繞堤竣工
41年	1966	田中調節池囲繞堤竣工
43年	1968	下館工事事務所発足
47年	1972	利根川工事実施基本計画策定
48年	1973	霞堤工事竣工。川俣ダム竣工。台風26号、稲荷川で土石流発生
50年	1975	田川放水路掘削築堤工事に着工
55年	1980	田川放水路護岸工事竣工
57年	1982	八間堀川水門新設工事着工
58年	1983	利根川工事実施基本計画改訂。川治ダム建設実施計画調査に着工
60年	1985	国営鬼怒川中部農業水利事業完了(佐貫頭首工竣工)
平成3年	1991	田川放水路掘削築堤工事に着工
5年	1993	田川放水路護岸工事竣工
8年	1996	八間堀川水門新設工事竣工
13年	2001	利根川工事実施基本計画改訂。川治ダム建設実施計画調査に着工
14年	2002	国営鬼怒川南部農業水利事業完了(勝瓜頭首工竣工)。八間堀川水門新設工事竣工
15年	2003	利根川工事実施基本計画改訂
17年	2005	日向砂防ダム竣工
18年	2006	川治ダム竣工
		岡本頭首工竣工
		鬼怒川・小貝川サミット会議創設
		下館市二木成(現・筑西市)に庁舎移転
		鬼怒川上流ダム群連携事業着工
		省庁再編により国土交通省下館工事事務所となる
		真岡河川防災ステーション完成
		下館工事事務所の名称が下館河川事務所となる
		鬼怒川上流ダム群連携事業竣工
		利根川水系河川整備基本方針策定

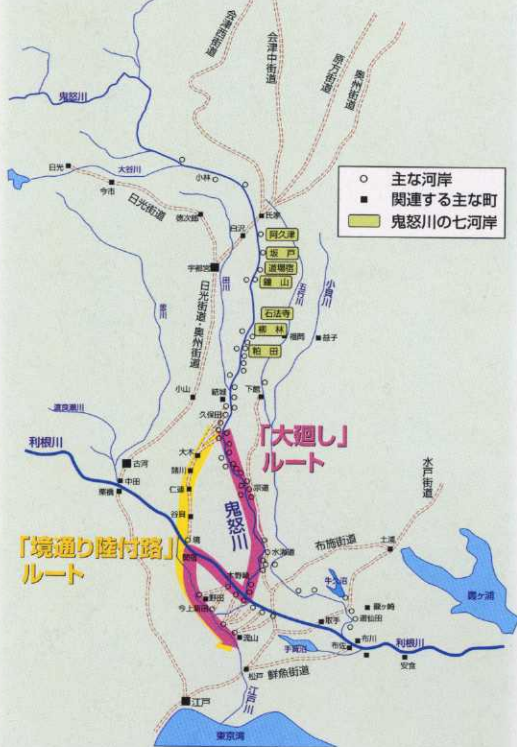
霞堤整備(S6)~S41
護岸工事(S4)~
築堤工事(S4)~
鎌庭捷水路開削(S3)~S11

田川放水路(S43)~S47

東遷事業で舟運と新田開発が盛んに

徳川家康によって行われた「利根川の東遷」事業の一環に鬼怒川・小貝川に分離があります。分離策では、東北方面の物資を早く運ぶため、水上交通を確保すること、広大な湿地であった地域を洪水から守り、新田開発を行うという二つの目的がありました。

●鬼怒川・小貝川の舟運航路図



●「大廻し」と「境通り陸付路」ルート

鬼怒川の水運は、東北地方から氏家に集まった荷物を主に阿久津河岸で小鵜飼船と呼ばれる小型の船に載せ、中流部の久保田河岸で大型の高瀬舟に載せかえ、利根川・江戸川を通り、江戸に運ばれました。この輸送ルートは「大廻し」と呼ばれ、主に米(廻米)などの重量物が運ばれました。

また急を要する物資や高価な品物は、久保田河岸で陸揚げされ、陸路で境河岸まで運び、そこから船に載せられ江戸に運ばれました。この輸送ルートは「境通り陸付路」と呼ばれました。

■江戸と東北諸藩を結ぶ物流の大動脈

天正18(1590)年、徳川家康は江戸城に上府すると、利根川の東遷事業と言われる工事に着手し、江戸に流れていた利根川を千葉県銚子のへと流し、現在の利根川水系の基礎を作りました。

この東遷事業によって、利根川水系では関東平野に巨大な水路網ができました。鬼怒川では、大型船が上流まで航行可能になり、東北諸藩と江戸を結ぶ水運路として活躍しました。江戸で消費される米の3分の2を占めていた奥州米や、東北諸藩の物産(最上や米沢の紅花・漆器・ロウ、会津や磐城のタバコ、水戸の和紙、結城の紬など)の輸送に、この水運路が使われました。また、江戸から奥州方面へ向う最も重要な商品は塩でした。

鬼怒川の水運を最も利用した会津若松藩では、年間12万~13万駄*にもものぼる荷駄を運んだといわれています。

鬼怒川流域には、多くの河岸(人や荷駄を揚げ降ろしする場所)ができ、沿川地域は大いに栄えました。

*駄とは、馬1頭の積載基準で、1駄は米2俵(約120kg)です。



▲上流部最大の阿久津河岸



▲鬼怒川中流部最大の久保田河岸(結城市)



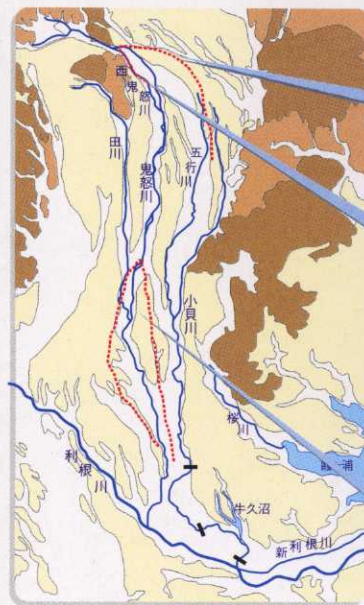
▲鬼怒川の水運で活躍した小鵜飼船

■新田開発と用水開発

「利根川東遷」の一環として行われた事業では、鬼怒川の氾濫地帯であった土地の本格的な開発ができるようになりました。その結果、流域では新田開発が盛んに行われ、多くの村と耕地が新たに生まれました。また流路の改修や護岸工事が進められ、用水路の開削が実施されました。

●江連用水

享保年間(1716~36)、鬼怒川と小貝川に挟まれた下妻市と水海道市に至る地域に灌漑用水が引かれました。その後、水位低下などにより廃止されていましたが、文政12(1829)年、四ヶ所用水を一本化した江連用水として再興されました。



市の堀用水

明暦2(1656)年に完成しました。受益面積2300haを擁する大用水路に拡大されました。

逆木用水

鬼怒川から分流された西鬼怒川を幹線用水路として、宝暦4(1754)年に47カ村組合が設立され、受益面積は、明治42(1909)年当時で1720ha。

吉田用水

享保8(1723)年に開発が始まった飯沼新田の代替用水路として同10(1725)年に完成し、88カ村の貴重な用水源となりました。



水害の歴史をふりかえる

鬼怒川は、流域に大きな恵みをもたらしてきましたが、ときには“あばれ川”と呼ばれるほど大きな災害を起こす川でもありました。特に昭和初期から25年頃までは、2年から3年に1回の割り合いで洪水が発生、流域の市町村は大きな被害に見舞われました。

●主な決壊箇所



鬼怒川の洪水

鬼怒川は、上流域に急な山々が連なっているため、降雨による影響を受けやすいという特徴を持っています。近年は、上流にダムが完成したため、洪水調節により洪水の規模を低減することができるようになりました。

◆昭和13(1938)年洪水

6月と9月の2度にわたって大きな洪水が発生。6月は、関東地方では激しい雨が降り続き、小貝川・利根川下流部など平野部で、非常に大量の出水がありました。

さらに、9月は、関東山地の東斜面や男体山を中心とする地域で大雨に見舞われ、鬼怒川・小貝川などで大出水となり、さくら市(旧氏家町)大中で破堤したほか、各所で越水しました。



▲筑西市下館駅前

◆近年の洪水

近年でもたびたび洪水が発生し、下流部の無堤地区で浸水するなど、さまざまな被害がありました。



▲平成13年9月東夢橋(栃木県上三川町)



▲平成14年7月豊水橋(茨城県常総市)



▲平成14年7月川島観測所付近

●鬼怒川洪水史年表

享保 8 (1723) 年8月	五十里沼決壊し、鬼怒川、田川沿岸の人畜の死傷無数、家屋流失による被害甚大。
弘化 3 (1846) 年6月	関東大風雨洪水。鬼怒川、田川などで洪水。
嘉永 5 (1852) 年	宇都宮暴風雨により田川、安川が大氾濫。
明治18 (1885) 年7月	関東大風雨洪水。鬼怒川の宝積橋が流失。
明治30 (1887) 年	鬼怒川、小貝川大洪水。
明治31 (1898) 年9月	東鬼怒川大水害。
明治35 (1902) 年9月	足尾台風のため鬼怒川が大洪水となり、死者156人。
明治43 (1910) 年8月	台風のため鬼怒川、渡良瀬川が氾濫し、死者15人。
大正 3 (1914) 年8月	暴風雨のため鬼怒川が氾濫。死者20人。
昭和10 (1935) 年8月	台風による温暖前線活発化による豪雨。
昭和13 (1938) 年9月	関東地方を襲った台風により鬼怒川が大洪水。大正3年に次ぐ被害。
昭和16 (1941) 年7月	台風の影響を受けた梅雨前線により大雨。鬼怒川上流域では3日間で300mm以上の豪雨。
昭和22 (1947) 年9月	カスリーン台風により鬼怒川が大洪水。
昭和23 (1948) 年9月	アイオン台風により鬼怒川下流部で計画水位を上回る。
昭和24 (1949) 年9月	キティ台風により鬼怒川全川で被害、さくら市(旧氏家町)大中大地先が決壊。
昭和25 (1980) 年8月	鬼怒川の水位は前年9月洪水に匹敵。
昭和34 (1959) 年8月	台風により鬼怒川上流域で豪雨、中宮祠で765mmの記録的雨量。田中・菅生遊水池の越流堤が決壊。
昭和41 (1966) 年9月	台風26号により稲荷川で土石流発生。
昭和56 (1981) 年8月	台風15号により鬼怒川上流山間部で総雨量300~500mmに達する。
平成 2 (1990) 年8月	台風11号による洪水。
平成 3 (1991) 年8月	台風12号による洪水。
平成10 (1998) 年9月	台風9号による洪水。
平成13 (2001) 年9月	台風15号による洪水。
平成14 (2002) 年7月	台風6号による洪水。無堤部で家屋浸水。
平成19 (2007) 年9月	台風9号により関東全域が集中豪雨に見舞われる。

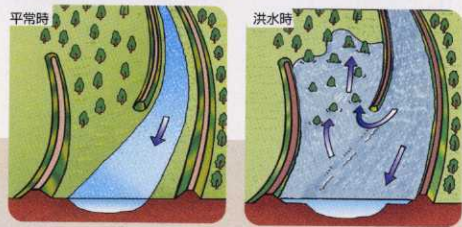
さまざまな対策で流域を洪水から守っています

鬼怒川では、水害を防ぎ水を利用するための多目的ダム、河川や地域の特性を考慮した堤防など、さまざまな対策が行われています。

中流部の霞堤

鬼怒川には、栃木県内の約44km区間に22カ所の霞堤が造られています。これらの霞堤は、昭和6年から昭和41年にわたって造られました。

霞堤は、堤防の一部に流路の方向とは逆向きに水の出口を造り、下流側の堤防が上流の堤防と二重になるようにした堤防のことです。洪水の時は、いったん堤防と堤防の間から水を溢れさせることによって、水の勢いを弱めます。洪水がおさまって川の水が少なくなると、溢れていた水はまた川に戻っていきます。



霞堤 戦国武将の武田信玄が考案したとされる堤防。不連続で重複した様子が霞のたなびくように見えることから「霞堤」という。今なお河川土木工学の手本とされている。

築堤工事

鬼怒川中流部の霞堤に対し、下流部では連続した堤防の築堤工事を行いました。



▲ラダーエスカベータによる築堤工事 (昭和10年頃、宇都宮市石井付近)

田中・菅生・稲戸井調節地

利根川との合流点付近では、鬼怒川の合流量が利根川の計画高水流量に影響を与えないように、3つの調節地の建設が計画されています。田中・菅生調節地は既成しており、稲戸井調節地の工事が進められています。

田川放水路、江川放水路

鬼怒川支川の田川・江川は、蛇行が激しく、無堤防部や低堤防のため洪水による被害が繰り返されていました。田川放水路や江川放水路により、洪水を直接鬼怒川に流すことによって、流域の洪水被害が軽減されました。



▲洪水時の田川放水路

上流のダム群

①五十里ダム

昭和31年、当時の日本で最も高い(112m)ダムとして完成しました。洪水を防ぐための水の調節、農業用水の供給、発電を目的として造られた重力式コンクリートダムです。



▲五十里ダム

②川俣ダム

昭和41年に完成した最も上流にあるダムです。五十里ダムと同様の目的で造られたドーム型アーチ式コンクリートダムです。



▲川俣ダム

③川治ダム

昭和59年に完成した最も下流にあるアーチ式コンクリートダムです。アーチ式ダムでは国内4位の高さ(140m)を誇ります。



▲川治ダム

④湯西川ダム(建設中)

下流域の水需要に対応し、洪水被害から暮らしを守るために建設中の重力式コンクリートダムです。

	五十里ダム	川俣ダム	川治ダム
有効貯水量	46,000千m ³	73,100千m ³	76,000千m ³
集水面積	271.2km ²	179.4km ²	144.2km ² ※
年間流入量	330,000千m ³	240,000千m ³	120,000千m ³
灌漑対象面積	8,941ha	8,941ha	7,149ha

※川俣ダムの集水面積を除く

暮らしを守る水防活動&情報提供

鬼怒川では、水防活動の拠点整備や情報提供のためのネットワークの構築により、洪水など緊急時に即応できるように備えています。

真岡防災ステーション

私たちの暮らしに重大な影響を与える洪水の発生に備えて、防災活動のための資機材を備蓄した、河川防災ステーションを整備しています。防災ステーションは、緊急時には防災活動のための拠点の役割を果たすとともに、平常時には防災学習会や情報交換などの場所として活用されています。



水防活動の支援

排水ポンプ車や夜間作業用の照明車などの「災害対策用機械」は、流域の方々の暮らしを守るために作られた特殊な機械です。この災害対策用機械は地方自治体に貸与され、流域の安全をバックアップしています。



光ファイバーネットワークの整備

河川沿いに施設管理用光ファイバーケーブルを敷設し、連続的できめ細かい効率的な施設管理、迅速な情報提供をしています。

●光ファイバー整備区間



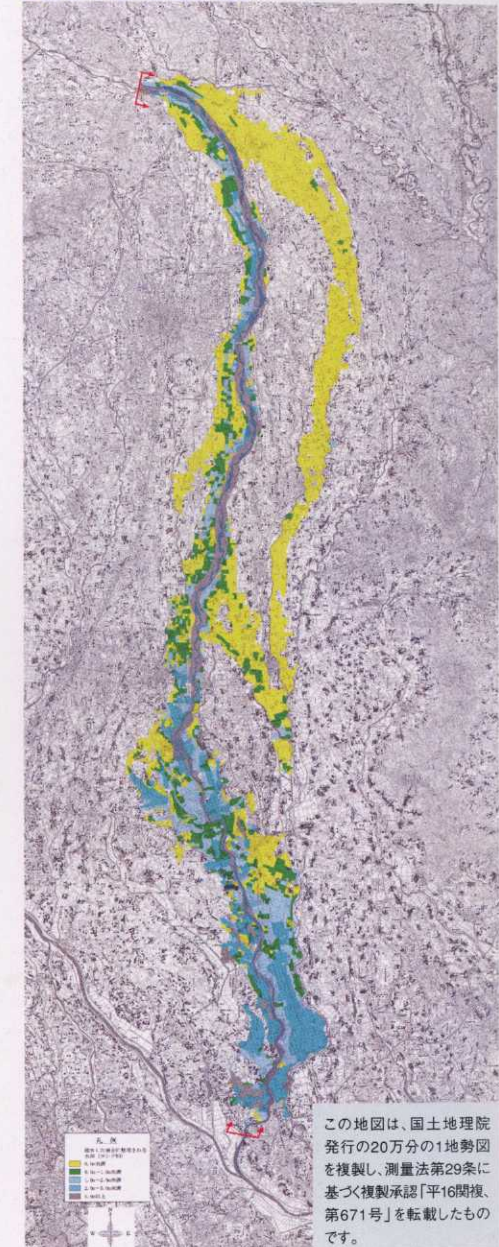
洪水予報の提供

洪水予報は、洪水などの被害から地域を守る水防活動や、地域住民が自衛手段を取るために重要な情報です。国土交通省では、大雨による洪水の恐れがある場合に気象庁と協力して、指定河川の洪水予報を発表しています。洪水予報は行政機関、マスコミを通じて発表されるほか、ホームページ、携帯電話のiモードでも入手できます。

洪水ハザードマップ作成を支援

「浸水想定区域図」は、鬼怒川、計画で想定している洪水（鬼怒川流域、石井上流域3日間総雨量402mm）が発生したときに、万が一破堤した場合の浸水想定区域および水深を示しています。この図をもとに、市町村は、「洪水ハザードマップ」を作り、住民の皆さんに洪水時の浸水想定区域、避難場所などの情報を提供しています。

●鬼怒川浸水想定区域図



この地図は、国土地理院発行の20万分の1地勢図を複製し、測量法第29条に基づき複製承認「平16開復、第671号」を転載したものです。

■下館河川事務所ホームページ
<http://www.ktr.mlit.go.jp/shimodate>

■川の防災情報（鬼怒川・小貝川）
<http://i.river.go.jp/cgi-ippan/title.sh>

鬼怒川・小貝川およびその他の河川の雨量・水位の情報をご覧いただけます。



■鬼怒川・小貝川 水位情報電話サービス
☎0296-25-2180

効果的・効率的な河川行政を推進

川は降水状況などによる自然現象や流域の変化などにより、その様子が大きく変わっていきます。このため自然災害から流域住民の生活を守り、川から受ける恵みを維持し、川の自然環境やうるおいのある空間の保全を図らなければなりません。そこで、常に川の状態を把握・評価し、対応が急がれるところから補修や改修あるいは計画の見直しを行うなど、サイクル型管理体系の充実を図る必要があります。流域の自治体や地域の方々との協働・連携して、このサイクル型管理体系の充実を推進し、効果的・効率的な河川行政を進めています。

安全な川づくりの課題

- 堤防の高さや幅が不足しています
鬼怒川の中下流部では、堤防の高さや幅が足りない区間が残されています。



▲堤防の高さ及び断面が不足 ▲大きくなった堤防

- 大規模な河岸侵食が発生しています
中流部では、洪水により川岸が一気に削られる状態が発生しています。



▲平成13年9月の洪水。出水により川岸が削られた東北新幹線橋梁付近

- 河床低下が進んでいます
鬼怒川では戦後復興期や高度経済成長期の砂利採取、利根川の河床低下などの影響で、河床の低下や部分的な深掘れが発生しています。



▲河床が低下している JR水戸線鬼怒川橋梁

- 浸透に対し堤防の安全性が低い区間があります
堤防は整備した時代の違いや、過去に何度も補修などを行ってきたことから、材料が均一ではありません。そのため場所によっては高い水位が長く続くと、水の浸透によって堤防の安全性が低くなります。



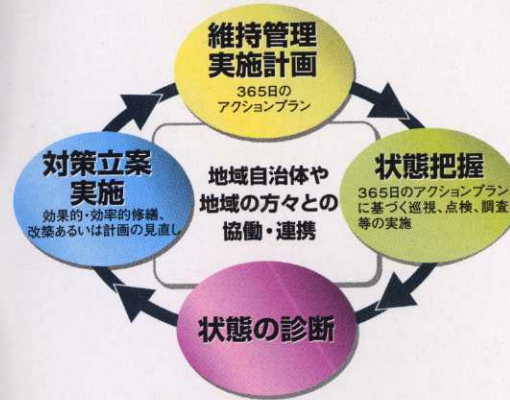
▲昭和57年9月の洪水による漏水状況。常総市樋ノ口地先

- 老朽化した樋管が数多くあります
鬼怒川にある樋管の約4割が築造後50年を過ぎており、老朽化による機能低下や安全性の低下が見られるものがあります。

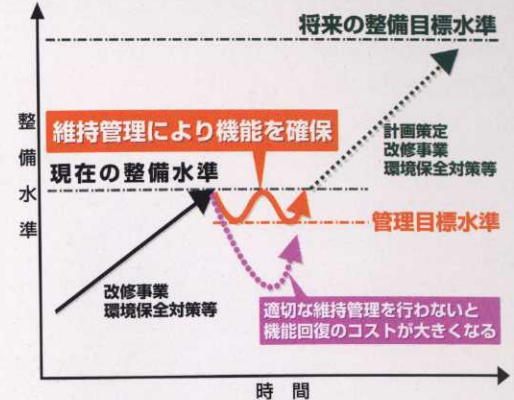


▲老朽化している樋管の内部

●サイクル型管理体系の充実



●整備水準の維持と改善



うるおいのある川づくりの課題

- 川特有の自然環境が減少しています
鬼怒川中流部では川の変化や外来種の侵入などにより、カワラノギクなどの礫河原固有の動植物が生育・生息できる場所が減少しています。



▲シナダレスズメガヤが侵入した礫河原の様子

- 時期によって流量が著しく少ない区間が生じています
取水堰の下流などで流量が減少したり、水利用の制限を受ける渇水が発生しています。



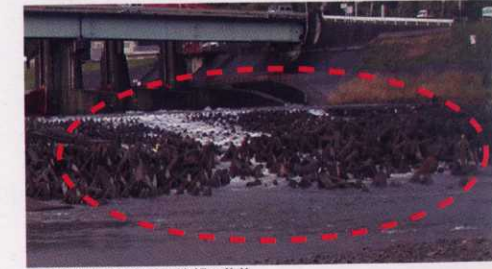
▲瀬切れの状況。平成16年5月、鬼怒川の上平橋付近

- 川とふれあえる拠点整備が求められています
鬼怒川では多くの人々が安全に川とふれあえる拠点の整備や、水辺に安全に近付ける環境の改善が求められています。



▲植物が繁茂して、水辺に近付きにくい河原

- 魚の遡上・下降が困難な場所があります
取水堰の下流部では、落差の進行や魚道がないことにより、魚類の遡上・下降が困難な場所があります。



▲鬼怒川勝瓜頭首工下流部の落差

■河川空間の利用

自然豊かな河川敷は人々の交流の場

平常時、自然があふれる豊かな河川敷は、人々が自然と親しみ交流する場として、さまざまな形で利用されています。

きよはら水辺の楽校

「きよはら水辺の楽校」として、子供たちや市民の皆さんが水と緑に親しみ自然体験を行う散策路や、安全に水辺に近づける親水護岸などの整備を行いました。



きぬがわ(千代川)水辺の楽校〈青龍楽校〉

「きぬがわ(千代川)水辺の楽校」として、子供たちが五感を働かせ、全身で川とふれあい、人として本来持っている能力を刺激し、育むことのできる教育の場として、ワンド、せせらぎ水路などの整備を行いました。



桜づつみ

市町と連携し桜並木をつくり、やすらぎのある水辺空間を整備します。さくら市、宇都宮市(2ヶ所)は整備済みです。



水辺プラザ「二宮水辺プラザ」

水辺を生かした地域交流拠点として、二宮町と連携しながら水辺プラザを整備しています。

鬼怒川・小貝川クリーン作戦

毎年7月の「河川愛護月間」の運動の一つとして、鬼怒川・小貝川サミット会議主催のクリーン作戦が平成4年にスタートしました。鬼怒川・小貝川流域の20市町村の皆さん13,000人以上が参加しています。堤防や河川敷に散乱する空き缶をはじめとするゴミを回収し、大きな成果を上げています。



鬼怒川・小貝川サミット会議

昭和61年8月の台風10号の被害を契機に、安全で快適な流域づくりのために、平成3年「鬼怒川・小貝川サミット会議」が組織されました。河川空間の整備、水環境の保全、地域交流を目的として各種イベントが開催され、交流の輪を広げています。

アドプトプログラム鬼怒・小貝

地域の皆さんが里親となり、河川敷などを里子のように大切にしていこうというプロジェクトです。行政の支援を受けつつ、清掃・除草・花壇整備などを行い、ゴミのない美しい鬼怒川・小貝川の実現を目指しています。

河川愛護モニター

市民の皆様から河川愛護モニターを募り、市民の視線で河川を見守る活動を行っています。モニタリング結果はレポートや意見交換会などで、行政に反映されています。

鬼怒川・小貝川 河川コーディネーター制度

河川に対して深い理解を持つ人や相互活動を行っている方々を河川コーディネーターとして、行政と住民や地域をつなぎます。



特別号

※rio [リーオ]とはスペイン語で「川」という意味です。

編集
発行

「鬼怒川・小貝川サミット会議」事務局・国土交通省 下館河川事務所

〒308-0841 茨城県筑西市二木成1753 ☎0296-25-2171 (調査課)

★「リーオ」はインターネットホームページでもご覧いただけます。

下館河川事務所HP ▶ <http://www.ktr.mlit.go.jp/shimodate/> E-mail ▶ shimodate@ktr.mlit.go.jp

●このパンフレットは再生紙を使用しています。